

農業掲示板 7月

水 稲

水管理・防除・穂肥

◎ 水管理

・中干し後は、出穂期まで間断灌水を行い水と酸素を供給します。出穂後は飽水管理(田面の溝や足跡に水が溜まっている状態)を行い、土壌を乾かさず水管理で根の活力を維持します。

◎ 病害虫防除

・雨が降り温度が高い日が続くなど高温多湿状態が続くと葉いもち病などが発生してきます。病気の拡大を防ぐためにも防除等の対処につとめていくとともに、昨年発生したほ場や山際のほ場では発生しやすいので早めの防除を心がけましょう。また、近年では紋枯病の発生も増えていきますので、畦畔の草刈りなどを行い、風通しを良くし発生を予防しましょう。

◎ 本田一斉防除

・出穂期前には、基幹防除として下記薬剤にて防除を行いましょう。

フジワンラップ粒剤	4kg/10a	出穂10~30日前 (但し、収穫30日前まで)	2回以内
トップジンスタークル粉剤DL	3~4kg/10a	収穫14日前まで	3回以内

※無人ヘリコプターによる散布を実施されるほ場については、必要ありません。

◎ 穂肥

・穂を大きくし、初数を増加させるために出穂18日前に施用します。

標準施用量	有機入り化成242	30kg/10a
-------	-----------	----------

※ただし、葉色が濃い場合は施用量を減らしましょう。

・施用量が多すぎると止葉が長くなり倒伏しやすく、受光態勢も悪くなります。結果として登熟が悪くなります。また、いもち病にかかりやすくなります。

また、施用時期が早いと下位節間が伸び倒伏しやすくなり、逆に時期が遅れると効果や食味の低下を招きます。

<穂肥時期の判定方法>

- ・適切な穂肥の施肥に向けて、生育が中程度の株を選び、草丈の最も高い茎を抜き取ります。
- ・下記の様に、葉鞘をはぎ、幼穂長を確認します。

葉鞘をむいて幼穂の形によって発育程度を調査

出穂前日数	20日前	18日前	11日前
幼穂長	0.2cm	0.8cm~1.5cm	10cm

<施用量の判定方法>

・ヨード反応は、完全に開いた葉の上から3枚目の葉鞘をヨードテンキの5~10倍液に浸し、葉鞘の半分以上が黒く染色すれば、標準量で施用します。

染色率	穂肥施用の目安
50%以上	標準どおり
50%未満	時期を遅らせる

小 豆

ほ場準備・播種・防草剤散布

<ほ場準備>

- ・畝立まえに苦土石灰(100kg/10a)、PK化成40号(40kg/10a)を全層施肥します。但しやせ土及び生育不良田では、PK化成のかわりにN K化成2号(20kg/10a)を施用します。省力型の場合は、豆腐(30kg/10a)を全層施肥します
- ・排水の悪いほ場は、生育不良や立枯性病害の発生を招くので、なるべく高畝(30cm以上)とし、谷を十分にさらえるなど排水対策を行いましょう。

<播種>

- ・種子消毒としてキヒゲンR-2フロアブル(乾燥種子1kgあたり原液20ml)またはクルーザーMAXX(乾燥種子1kgあたり原液8ml)を塗抹処理します。
- ・播種時期は7月25日頃を目安とします。早播きすると茎が伸びすぎ倒伏したり、蔓ぼけしやすくなり、また遅播きは生育期間が短く、減収となりやすいので適期播種を心がけましょう。(播種深さ5~8cm)
- ・播種間隔は、畝幅150cmの場合、条間50cm、株間20cm、2条千鳥播きとし、1穴1粒播きとします(6,600株/10a)。※播種時期に高温乾燥が続く場合は、深播き(8~10cm程度)を行いましょう。

<除草剤散布>

- ・雑草対策として播種後、小豆の発芽前にトレファノサイド乳剤(300ml/水100ℓ/10a・使用回数1回)または、トレファノサイド粒剤2.5(4~6kg/10a・使用回数1回)を散布します。

農業掲示板 7月の農作業

黒大豆・えだまめ

黒大豆・黒枝豆の中耕・栽培について

・大豆栽培において中耕・培土作業は収量確保のための大切な作業です。作業が遅れないよう計画的に行いましょう。

中耕・培土作業により以下の効果が期待できます。

- 土壌の通気性を良くし、新しい根や根粒の発生を促す
- 根域の拡大により大豆の生育を助けると共に倒伏を防止する
- 雑草の発生を抑制する
- 作土を膨軟にして水分を保持しやすくなり、干ばつ害を防ぐ

中耕・培土作業の実施方法は以下のとおりで、7月下旬までに2回実施します。

- 第1回培土は、7月上旬、子葉(まめ葉)が隠れる程度(初生葉の下まで)
- 第2回培土は、7月20日までを目安に、本葉5葉が発生するまでに、初生葉が隠れる程度(第1本葉の下まで)

- ・7月末以降の遅い時期に作業すると、発生し始めた浅根を切ってしまう、後半の生育や開花に悪い影響を及ぼします。したがって、長雨などで作業が遅れた場合は、あまり株際の深い位置まで中耕しないようにしましょう。
- ・また、土壌の水分が高い状態で無理をして作業すると、茎疫病(図2)の発生を助長することになりますので、天気予報等に注意し、早めに作業を進めましょう。

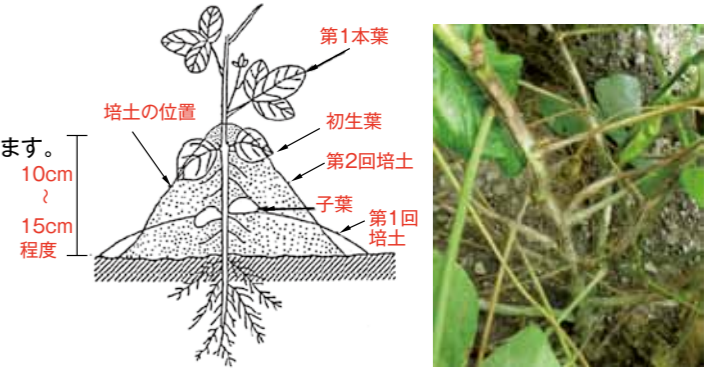


図1 中耕・培土の方法



図2 茎疫病の症状

く り

栗の実につく病害虫防除と新植栗の管理について

・病害虫防除

〔クリイガアブラムシ〕

イガが青いまま裂果(若ハゼ)するのは、クリイガアブラムシが原因です。6月下旬頃にイガの付け根に黄色い粉状のものが見られれば、速やかにエルサン乳剤1,000倍液(収穫14日前まで・200~700ℓ/10a・4回以内)、またはアドマイヤー水和剤1,000倍液(収穫7日前まで・200~700ℓ/10a・3回以内)をイガにかかるように丁寧に散布しましょう。

〔ネスジキノカワガ〕

6月頃から幼虫が幼果に食入し落果させます。落果した果実を焼却するなどして、次世代の被害予防に努めます。第二世代以降はモノゴマダラノメイガと発生時期が重なることもあり、モノゴマダラノメイガの防除により被害が軽減できます。

〔モモノゴマダラノメイガ〕

モモノゴマダラノメイガは7月下旬から8月下旬頃、イガが直径7cm以上の大きさになると卵を産み付け、幼虫が果実を食い荒らします。この時期に、エルサン乳剤1,000倍液(収穫14日前まで・200~700ℓ/10a・4回以内)、もしくはフェニックスフロアブル4,000倍液(収穫前日まで・200~700ℓ/10a・2回以内)をイガにかかるように丁寧に散布しましょう。

〔クリシギゾウムシ〕

8月から9月にかけて成虫が羽化し果実に移動、産卵します。果実に侵入して食害した幼虫は9月~10月に脱出して土の中で蛹になり越冬します。このため、前年にクリシギゾウムシの発生があった園では8月にアディオソル乳剤2,000倍液(収穫14日前まで・200~700ℓ/10a・5回以内)で防除を行いましょう。できるだけ毎日収穫を心がけ栗果実は全て拾い集めましょう。園内に被害果を残さないようにしましょう

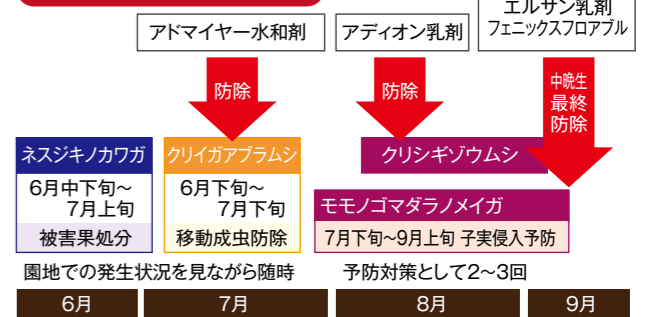
〔実炭そ病〕

特に早生品種に発生が多く、降雨により広がります。7月下旬から8月下旬頃にかけてベンレート水和剤2,000倍液(裂果前、但し収穫14日前まで・200~700ℓ/10a・4回以内)またはベルコートフロアブル1,000倍液(収穫14日前まで・200~700ℓ/10a・2回以内)をイガにかかるように丁寧に散布しましょう。

(新植栗の管理ポイント)

- ・株際の台芽は、かき取りましょう。また、一カ所から複数の芽が出ている場合は1~2本残して間引きしましょう。
- ・干ばつ防止のため、梅雨明け前までに数草・数ワラを行います。

栗の実につく害虫の防除モデル



今後の

24時間OK /

農業技術テレホンサービス
電話:079-556-3384

6月18日 ▶ 7月1日

山の芋の
追肥と防除

7月2日 ▶ 7月15日

小豆の
播種と管理

7月16日 ▶ 7月29日

黒大豆の病害虫
防除と水管理

丹波篠山農産物相談・研究センター 開所日時:月・水・金の週3日 10:00~12:00 (ただし祝日・年末年始を除く)